

## いのち

住職 堤 俊翁

私達は「如来様から頂きたいのち」と良く言います。

親からもらった此のからだ、先祖から受け継いだ家、財産とその有り難さに感謝して、今日あることを喜びましょう。とよくお説教でも布教師のお上人からお話いただきます。時折考えてみると私のいのち、子供のいのち、動物や昆虫をはじめとして草花、木々ありとあらゆるものにいのちがあります。いったいいのちとはどこからいただいたものなのでしょう？

病気で、あるいは事故で、最近はいわれもないのに突然刃物でさされる、小学生がピストルで撃たれて亡くなる。なんとも恐ろしいニュースが毎日のようにテレビなどで放映されています。

そうやっていのちを落とす人がいる。いまあるいのちはいったいつまであるものなのか不可思議でしかたなくなります。

人類は500万年まえから地球上にいるといいます。いのちはその時からなののでしょうか、それとも生命が地球上にあらわれた40億年まえから、いや地球が誕生した46億年前にさかのぼるのか、もっとまえ、宇宙が生まれたときからなのか、まさにはかるとのできない不可思議なものであるようにおもわれます。

お念仏を申す中でその有り難さを感じていきたいものです。

合 掌



## 葬儀を考える

葬儀式について

生きているということは、死に向かっていることだ、これは言うまでもありません。わたしたち人間は、いや人間も含めた生物は、この世に生を受けた瞬間に必ず死を迎えることを、その定めとして生活をしています。法然上人が浄土宗を開宗された時代は、それこそ人の寿命は現代に比べると非常に短く、また伝染病などで多くの命が失われたりするなど、死そのものがもっと身近にありました。ですが、現在は医療の発達や環境の変化などにより、死というものの親近感は薄れてきています。このごろでは死を迎える場所はほとんどが病院になり、家族が見守る中で息を引き取ることはいぶんと減ってしまいました。かつては臨終の人の手に五色の糸を結んだり、来迎仏の掛け軸を掛けるなど、死を迎

える準備をそれぞれ家族でしたものです。また本当に死んでしまったのか、蘇生するのではないだろうか、こういったわずかな望みを家族が断つのに、時間が必要でした。

こうした昔からのさまざまな慣習やしきたりなどが集大成されてきて、現在の葬儀式(葬儀)があります。ですから、一見なんのためなのかかわからないような事でも、それなりの理由があるのです。この段では葬儀はもとより、葬儀にまつわるいろいろな事をこうした成り立ちを含めて見直してみたいと思います。喪主になる機会は、ふつう一生に一度あるかないかといえますし、また、親族になることも限られています。ですが、死は老若男女も季節も時間も問いません。突然訪れるものです。ですから、そうした時にあわてず臨むためにも、この宝典をお役立てください。

(浄土宗檀信徒宝典より)

今回は葬儀の心構えと流れです。

# 仏事のQ&A

## Q 主人の亡弟の納骨

の折、両親のお墓に花と線香を供えたところ、「ついで参り」はいけないと叱られました。ほんとうですか。

## A 仏教でのお墓

は、この宇宙を構成する元素である地水火風空の五大と、識大とよばれる偉大な心のはたらき、それら全部をこめたものとして墓を形づくり、塔として建てたものです。それは大宇宙そのものであり、永遠の生命そのものの象徴として受け取ってきております。

お墓参りについては、次のことを考えなければなりません。

過去からの深いつながりによってわたしたちが今あり、さらに今生、来生という三世の生命のつながりの中に、生かされているということに思いをいたさなければなりません。

わたしたちは突然この世にあらわれたのではなく、何十億の先祖、そして両親を縁として生まれてきているのです。つまりお墓参りをすることとは、亡くなった方のためだけでなく、自分の肉体をつくりだしてくれた不思議なご縁に対して素直になるということであり、謙虚になることを意味します。

お墓参りとは、自分を自分たらしめている因縁に対して頭を下げることなのです。

土地によっては、ご質問にありますように「ついで参り」を嫌うところもあります。

これは「ついでに」というような消極的な墓参りの姿勢ではなく、はっきりとした目的意識の上に立って、お墓にお参りしてほしいという気持ちから出てきた風習で、例えばお墓が遠距離にあり、参りたいというお気持ちが誠実なものである場合

などには、むしろよい機会を与えていただいたと思って、ご両親やご先祖さまにお墓参りしていただいて結構かと思います。

そして、亡くなられた方のご恩をしのび、今生かされる生命を感じる、よりよき縁としていただきたいものです。

お墓参りの順序は、ご本尊さま、お墓、そして無縁仏へもお参りするのがたいへん望ましいことです。

浄土宗なんでも相談室より

う古めかしい「しつけ」はないかもしれないが、例えば、プロ野球などで一打同点または勝ち越しのチャソスに、期待の打者が三振したり、ランナーが凡ミスで殺されたりすると、観客席から、思わず「惜しい」とか「もったいない」という慨嘆のつぶやきが聞えることも多い。「もったいない」という言葉は、このように使える物を粗末にしたり生きる好機をみすみす失ったりする時によく使われる。

つまり尊い「もったい」を「なくする」意味である。「もったい」というのは、世の中の事、物、すべては、みな互いにもちつもたれつのでこそあれ、それ自身単独でわが本体とすべき存在ではないという仏教の基本な考えを示すもので、「体なし」すなわち「勿体」という漢字をあてるのである。逆にいえば、「勿体」は事物のすべてが互いに多くの縁でつながっている状態を示し、「勿体ないし」はその一端をつぶし汚す結果を招くところから出たわけである。いわば「おかげ」を無視して万物のいのちを無駄にする心が「もったいない」に通じるのである。

え！これが仏教語？

## もったい 勿体ない

昔の食卓では、子どもがご飯をこぼしたりお菜を食べ残したりすると、親から「もったいない」といって叱られ、一粒のお米でも拾わされたりしたものである。今は、そ

## 観経曼陀羅の世界



阿弥陀様のお浄土  
西方極楽世界とはいっ  
たいどんなところでしょう。

浄土三部経のひとつ観  
無量寿経に説かれる世界  
をスライドをつかってお  
見せします。

春季彼岸法要の日  
来る3月20日(中日)  
午後1時より御回向  
その後引き続き